Osaka University Knowledge Archive

Title	ホワイトチャペル・ギャラリーの「20世紀の芸術」展（1914年）再考
Author(s)	横山, 千晶
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75348
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ホワイトチャペル・ギャラリーの「20世紀の芸術」展（1914年）再考

横山　千晶　慶應義塾大学

1.「20 世紀の芸術展」の開催

1914 年 5 月 8 日から 6 月 20 日の間に，ロンドンのイーストエンドにあるホワイトチャペル・アートギャラリー（現在のホワイトチャペル・ギャラリー）で，“Twentieth Century Art: A Review of Modern Movements” という展覧会が開催された。前年 6 月 17 日にはギャラリーの建設に寄与した大学セツルメント運動発祥の場所，トインビー・ホールの館長，サミュエル・オーガスタス・バーネットが亡くなっており，トインビー・ホールもギャラリーも転換期を迎えていた。同時にその夏に始まる第一世界大戦の足音もそこまで近づいていた頃である。

そんな年の幕開けと共に，館長のギルバート・A・ラムゼイのもとで，この画期的な展覧会の準備が本格的に開始された。1914 年 2 月 7 日付のバーネット夫人のヘンリエッタ・オクタヴィア・バーネットの手紙は，展覧会の顧問委員会設立に関するラムゼイの問いに答えたものであるが，展示品に関しても意見を提示している。ヘンリエッタは「ホワイトチャペル・ギャラリーはホワイトチャペルの人々のためのものです」と強調したうえで，ポスト印象派や未来派の視点や表現の大々的な紹介は，避けるように助言している。ここでいうホワイトチャペルの人々とはその多くが東欧系ユダヤ人移民の労働者たちである。ヘンリエッタは彼らが新しい芸術を理解することはないだろうと明言しつつも，新たな芸術表現の危険性をも示唆していた。またヘンリエッタと同じくギャラリーの評議員であった W・H・デヴィソンも，2 月 5 日付のラムゼイ宛の手紙で「キュビズム」や「未来派」の作品は展示すべきでないと伝えている。

結局，展覧会は顧問委員会を設けることなく評議員会の名のもとにラムゼイの監修で行われることとなった。494 点に及ぶ展示品は 4 グループからなり，第一部はニュー・イングリッシュ・アート・クラブの会員ウォルター・シッカートとリュシアン・ピサロの作品とその影響。第二部はピュヴィス・ド・シャヴァンヌ，アルフォンス・ルグロ，そしてオーガスタス・ジョンの影響。第三部はポスト印象派の影響。そして第四部ではウィンダム・ルイスとヴォーティシズムの画家たちの作品，つまりイギリスにおいてヨーロッパのキュビズムや未来派の影響を受けたアーティストたちの作品が多数展示された。また第四部には，絵画のみならずオメガ工房の工芸品や装飾品も含まれた。ここで注目したいのは，展覧会のカタログの紹介文では，第三部に関しては「ポスト印象派」の言葉を避け，「後期印象派のころから現れた芸術」という表現が使われ，第四部に関しては，キュビストや未来派といった言葉は全く使われておらず，アーティストの名前も紹介されていないことである。ラムゼイは明確な表現を避けながらも評議員の意向に真っ向から反旗を翻したことになる。

それだけではない。ラムゼイはヴォーティシズムの画家，デイヴィッド・ボンバーグとニューヨークからイギリスに移り住んだ彫刻家，ジェイコブ・エプスタインに第四部の一部をなす「ユダヤ・セクション」の展示企画を任せたのである。24 歳のボンバーグはスレイド美術学校を 1913 年に卒業

したばかりの新進気鋭の画家で，同年にエプスタインと共にパリを訪問し，キュビズムの創始者ともいえるピカソやモディリアーニの知己を得ていた。今回の展覧会でもモディリアーニの作品が2点（彫刻と，彫刻のための下絵）展示されていた。まさにこの展覧会の閉会直後の1914年7月2日に，ヴォーティシズムの雑誌，『ブラスト』の刊行が始まっている。

2. ラムゼイの辞職と展覧会の意図

この展覧会が呼び起こす内外からの反響について，ラムゼイは予測していたはずである。初日から4日後の『デイリー・テレグラフ』では，ウォレス・コレクションの初代館長のクロード・フィリップスが，現代美術の新しい潮流を網羅的に扱った展覧会の冒険的な態度を評価しつつも，近隣住民に対する十分な準備と警告もなしにこのような展覧会の門戸を開いたことに関する重大な責任を問うた。そのような評価を受けて，評議員のデヴィソンは，評議員長のハリー・ローソンに2月5日付のラムゼイへの手紙の写しを送りつつ，自らの立場を弁明し，ラムゼイを非難している。

結局ラムゼイにとって，この展覧会はギャラリーのみならず，ホワイトチャペルでの最後の仕事となった。すでにこの6月，ことによると会期中にギャラリーの事務長，キャンベル・ロスの名前で次期館長募集の手紙が関係者に送られている。理由はラムゼイがGlasgow Art Galleries and Museumsの管理者になったことが挙げられているものの，おそらくラムゼイがこれ以上ホワイトチャペルにいることは困難だったのだろう。次期館長の候補を紹介するエリック・ギルの手紙からは，モダニズムに傾倒していない人物が，採用に際して望まれていたことがうかがえる。

5月8日付の『タイムズ』紙の記事は，この展覧会を「ホワイトチャペルからピカデリーへの挑戦」と呼んだが，ラムゼイが意図したのは，ホワイトチャペル内部における芸術の意義や芸術観への挑戦だったと考えることができよう。1911年，ラムゼイが館長に就任したころに書かれたエッセイ，「イーストエンドでの芸術」で彼は，イーストエンドの人々は絵画の主題には興味を示すが，芸術的な質にはほとんど興味を示さないと述べる。しかし，ニュー・イングリッシュ・アート・クラブや最近のポスト印象派の影響を受けた絵画をみれば，人々の生活が芸術的な表現から切り離されることなく描かれている。思想ではなくそのような新しい表現を積極的にイーストエンドの人々に紹介していくべきだという考えを，すでにラムゼイはこのエッセイの中で提示しているのである。

3. 新しい芸術の胎動

同時にラムゼイはapplied artの重要性をも強調しつつ，身の回りの真の美しさを考える健康的な喜びが復活することは，労働の質や人格形成にも大きな影響を与えるはずだと明言する。そしてエッセイの最後にラムゼイが掲げる希望は，イーストエンドの若者たちと芸術との関係である。大人たちの好みを変えることはできない。しかし若い世代は別だとラムゼイは述べる。

この姿勢はそのまま1914年の展覧会の企画へとつながっていったのだろう。新しい芸術と若者たちとの密な関係は，ここイーストエンドで結ばれつつあった。ボンバーグをはじめとし，「ユダヤ・セクション」に作品が展示されたアーティストたちは，「ホワイトチャペルの息子たち」と呼ばれたイーストエンド出身のユダヤ系の若い芸術家だった。イーストエンドが生み出した新しい才能は，まさにラムゼイが希望を託した次の世代だったのである。

ラムゼイは翌年，1915年7月に戦死した。しかし，モダンアートのメッカとしての現在のホワイトチャペル・ギャラリーの立ち位置を考えれば，彼が唱えた芸術の意義は，現在のギャラリーの基礎となっているといえよう。